新聞学を拓いた人たち

——日本ジャーナリズム成立史に棹さす——

藤原　恵

福地源一郎（桜痴）の「懐往時談」は1894年（明治27）4月に徳富蘇峰の主宰する民友社から単行本として出版された。桜痴居士といえばわが国における新聞記者の草わけであるが，この「懐往時談」には「附新聞紙実歴」と表紙に印刷してあり「新聞紙実歴」は同書195ページから247ページにかけて実に詳しく記述している。福地自身の経験が中心であるが，わが国新聞発達史にとっては非常に貴重な史料となっている。彼の幕末史関係のものとしては「懐往時談」のほかに「幕府衰亡論」が明治25年12月に出ており，明治33年6月には「幕末政治家」が同じく民友社から刊行されている。この三部作はいずれも名著と目されており「幕府衰亡論」は最近複刻された。

以上の三書はいずれも徳富蘇峰のやっていた「国民の友」誌上に連載したものを，あとでまとめたものであるが，その執筆当時の時点では何といっても，明治時代における第一流の知識人である。しかし性格的には“まとも”ではなく，放蕩と変節で名を残したという気のどくな人である。この福地が「新聞紙実歴」のトップに「新聞紙を知得て欣喜の情を起したる事」という第一章に新聞紙類似物としていちおう新聞活動の機能をもっていた風説書をとりあげていることは注目される。その一節を原文のまま引用してみよう。

余が15，6才のころ未だ郷里の長崎にありて我師名村花蹊先生に就て和蘭語を学び稽古通詞たりし時に，和蘭人より年々来舶の度ごとに風説書と名けたる書面を出して海外の事情を長崎奉行に報告したり（中略）此風説書は甲比丹が如何なる方法にて出島に居ながら斯は知得るものにやと尋ねしに，先生去ばなり西洋諸国には新聞紙（ニーウエス）と唱へ毎日刊行して，自国は勿論他の外国の時事を知らしむる紙あり，甲比丹は其新聞紙（ニーウエス）を読で専ら其中より重立たる事柄をば斯は書き記して奉行所へ言上いたすなりと告げ其座右にありける和蘭新聞紙の反古を出して余に与へられたりき，此反古はアムストルダム刊行の新聞なりけるが（中略）是余が初めてニーウエスの語を聞きて其物を見たる始なりき。

福沢諭吉の時事新報

こういった調子で淡淡として新聞の歴史を述べている。福地桜痴と交際のあった当時の人物としては柳川春三，成島柳北，福沢諭吉，栗本鋤雲，藤田茂吉，末広重恭，岸田吟香，末松謙澄，甫喜山景雄，矢野竜渓，箕浦勝人，関直彦その他錚錚（そうそう）たる新聞人がいたことは明らかである。しかし福沢諭吉にしても時事新報を発刊したとき（1882年・明治15年3月1日）時事新報発兌之趣旨という長文を執筆して「人の言に云く，人間最上の強力は求るなきに在りと。我輩は今の政治社会に対し，又学者社会に対し商工社会に対して，私に一毫も求る所のものあらざれば亦恐るるに足るものなし。唯大に求る所は国権皇張の一点に在るのみ。我輩は求るなきの精神を以て，大に求る所のものを得んと欲して敢て自から信ずるものなり」で結んでいるが福沢プランを実現せんがための中立的立場をとる“政論新聞”を意図しているものと理解されるだけである。またこういうこともいっている。すなわち「其名を時事新報と命じたるは，専ら近時の文明を記して此文明に進む所以の方略事項を論じ，日新の風潮に後れずして之を世上に報道せんとするの旨なり」とあり調子は高い。時事新報は「国旗は日の丸，新聞は時

事」のキャッチフレーズで一時勢力を伸ばしていたが，1936年（昭和11）遂に蒸発してその姿を消した。

福沢諭吉を引っ張り出したのは他意はないのであって，このような大先覚者ですら，新聞のあるべき姿といったようなことについてはひとこともしゃべっていないのである。もちろん桜痴の友人と目される前述のそうそうたる新聞人は，それぞれ新聞を発刊したり，雑誌を出したりしており，わが国言論史に残る業績を示している。福沢諭吉にしても学者であり思想家でありジャーナリストとしては理想的なタイプの人といえるが，新聞学を拓いた人とはいえない。桜痴の場合は「新聞紙実歴」の中でいろいろと示唆している。彼が1874年（明治7）12月 1日，東京日々新聞に入社，社長となり「紙面を拡張し体裁を改良し，社説の一欄を設けて余が意見を世上に発表する事とは成りたりき」と軽く触れているが，この社説欄を設けたという一事だけでも，日本の新聞史に一時期を劃したといえる。新聞の機能としては to inform, to instruct, to entertain といわれているが，instruct を考え出してそのスペースをつくったことは，何といっても先見の明があったと思う。

1877年（明治10）桜痴は西南役に従軍した帰途，大阪で明治天皇に戦況報告をしているが，従軍記者としてもハシリである。彼は桜痴居士の筆名をよく用いているが通称は源一郎，諱は万世（つむよ）号は星泓といったがのち桜痴に改めた。1841年（天保12）辛丑3月23日，長崎新石灰町に生まれ父は儒医で苟庵という。1906年（明治39）1月4日東京芝区愛宕下の寓居で歿した。年66。

岩手日報の図書目録

桜痴の「懐往時談・附新聞紙実歴」が出版されたのは前述のように1894年（明治27）4月であるが，出版の2年前明治25年11月から26年12月までおよそ1年間にわたって，雑誌国民の友誌上に連載されたものである。徳富蘇峰が桜痴をしてその昔日譚を語らしめた動機は一体なんであったか知る由もない。しかし桜痴にしろ蘇峰にしろ，その数年前に刊行された天野鎮三郎著「泰西新聞論」を知らぬはずはなく，またその発行所が丸善商社書店であってみれば，泰西新聞論はかなり知れわたっていたと思われる。この泰西新聞論に触発されて「新聞紙実歴」を上梓した動機にもなっているのではなかろうか。思いすごしかも知れぬがそんな気がする。よき書物はいつまでもよき読書人の心奥に残っているのが当然である。ここで泰西新聞論という名著に触れておきたい。

1935年（昭和10）7月に盛岡市の岩手日報社が創刊60周年記念として「新聞関係図書目録」を発行（非売品）している。おそらくわが国で出版されたこの種の図書目録としては最初のものであるといえよう。岩手日報の記者上田十郎が編集したことになっている。凡例によると帝国図書館，東京帝大法学部明治新聞雑誌文庫，東京朝日新聞社の蔵書に負うところが多い旨記している。現本を確認して目録をつくったものだろうとは思うが，時折間違いがある。書目の数も355種程度であるが，昭和10年の時点でこれだけまとめあげた上田十郎の努力は高く評価される。

1945年（昭和20）8月15日，終戦の日を意識的に選んで社内用に編集刊行した「藤原恵文庫」目録は岩手日報社刊行の目録よりはるかに多くの種類を集めている。しかし「藤原恵文庫」は古版新聞紙などを含んでいるので単なる図書目録ではない。私が朝日新聞記者として在社中に蒐集したもので，現在朝日新聞大阪本社調査部の朝日文庫の中に，別のスペースをとって所蔵している。

貴重な目録「東天紅」

もうひとつ私の知る限りにおいては東京の羽島知之という人が「羽島コレクション」—新聞関係資料目録—というのを1959年（昭和34）12月にこれも前記2目録と同様に非売品として出版している。幕末明治新聞編，新聞関係図書編，新聞関係資料編の3部にわけて，かなり広範囲に蒐集し目録をつくっている。放送，出版，マス・コミュニケーション，雑誌といったジャンルを含めていることにもよるが「藤原恵文庫」よりも多く収容しているのではないかと思う。

ほかに東京帝国大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵目録が「東天紅」全，続，三，の3巻にわかれて，宮武外骨が文庫主任をしていた1930年（昭和

5）から1941年（昭和16）にかけて発行している。各巻の巻末に「新聞雑誌関係図書」をかなり多数列記しているが，数の問題よりも一般には入手困難な稿本類まで蒐めており，その意味で「東天紅」は貴重な目録である。

朝日新聞社の上野精一社主は新聞研究60年のキャリアーをもつ新聞学界のベテランでもあるが，1955年（昭和30）3月から京都大学経済学部に新聞関係をふくむ一般図書を継続して寄贈している。上野文庫解題目録は一般部門(1)新聞部門(1)(2)の計3冊出版されている。その収容冊数は8,792冊で，うち新聞関係図書は3,548冊を占めている。1961年（昭和36）6月までの寄贈分を整理し目録3冊に編集したもので，上野家からの寄贈が続いているはずだから現在は更に収容図書は増加している。上野文庫には外国関係特にイギリス関係のものが多く，わが国で出版された新聞関係図書についてはそれほど多いとはいえない。しかしジャーナリズムに関心をもつほどの者はいちおう座右に備えておかなければならない文献目録である。

マスコミの文献目録

マス・コミュニケーション理論というものが戦後アメリカから輸入され，マスコミという日本語まで普遍化定着してしまった現在はマスコミ時代といわれるほどの盛況である。従ってマスコミ関係の書物も文字通り汗牛充棟といったありさまで続続出版されている。これらマスコミ関係の単行本にはお座なりにしろ，文献目録のようなものをくっつけている。もちろん少数の文献目録にしても，なるほどと思われるようながっしりとした“文献目録”を付けているのもある。たとえば最近出版された「戦後のあゆみ・新聞ジャーナリズム」新井直之著—1966年7月，図書新聞社刊—第2部の「文献」編など31ページにわたってうまく分類し配列を考えてまとめているのは親切である。反体制的だとかなんだとか批判されたらしいが，ジャーナリストというもの，またジャーナリストの書いたものは当然そのような志向はみせているものである。

もうひとつ新しいところでは有斐閣双書の1巻として「マス・コミュニケーション入門—日高六郎，佐藤毅，稲葉三千男編」1967年2月刊がある。その巻末に「読書案内室」として「これから学ぶ人たちのために」215冊（実際はもっと冊数が多いが文献解説の中で取扱っているようである）と定期刊行物までとりあげている。最近の刊行であるだけに近刊書目が多いのは当然とはいえ，マスコミ関係図書目録としてはよく出来ている。

日本新聞協会が編集して電通から出版している「日本新聞年鑑」にはその年内に出版された「新聞関係図書一覧」をのせている。経営業務関係方面や放送関係，特に「雑誌掲載論文」一覧表など参考になる。協会の月刊機関誌「新聞研究」ではあまりこの種のサービスはしていないが，古いころ1950年（昭和25）10月号で岡野他家夫（当時日本大学新聞学科講師）の「新聞研究文献」を特集している。だれかがどこかで黙々として新聞関係図書目録をつくっているのである，と思うとおのずと心が暖まる感じがする。

「泰西新聞論」について

以上のほかにも2，3社会科学関係の雑誌や業界誌などに新聞関係図書のややまとまった紹介欄があった気がするが，ここではこれ以上の詮索はやめておこう。なぜ必要以上に新聞関係図書の目録を調べてみたか。ちょっと説明しておきたいことがあったからである。というのは天野鎮三郎の「泰西新聞論」はこの種の目録でどのようにとりあつかわれているかを見たかったからである。第一既刊の目録に収録されているかどうかも確かめてみたかった。ところでこの「泰西新聞論」を収録しているのは岩手日報目録，藤原恵文庫，上野文庫の3目録だけであることを発見した。岩手日報目録は現本を確認して登載したものではあろうが，帝国図書館か，東京帝大法学部明治新聞雑誌文庫か，朝日新聞東京本社文庫の3カ所のうちの何れかに所蔵しているものと思われる。あるいは編者上田十郎かも知れないが，66年版日本新聞年鑑記載の岩手日報社役員，幹部名簿には上田十郎は見当らないので確かめようがない。東大法学部の文庫目録「東天紅」3冊を調べたが資料欄にはのっていない。

藤原恵文庫では「海外新聞」という“柱”をた

てアメリカ，イギリス，ドイツ，フランス，ソ連，中国，満州（朝鮮）の順で各国の新聞史，経営事情，新聞法制などに関する図書を列記しているが，そのトップに「泰西新聞論」を出している。私がこの本を入手した経路は自慢たらしくなるので，いささかおもはゆいが実は何でもない。1939年（昭和14）7月8日，東京の木内書店から3円50銭で購入，小包で自宅へ送ってもらっただけの話である。木内書店の古書目録にでものっていたのかも知れない。この本は私にとって初見であったのはもちろんである。しかし27，8年もむかしにこの本を読んだのかどうかは思い出せない。序文が漢文だしめんどうがっておそらく読んでいないのではないかと思う。

1961年版の上野文庫解題目録・新聞部門(2)にはComparatve aspects（比較新聞学）の項に解題つきで紹介している。ついでだからその本文をそのまま引用してみよう。

新聞の政治批判と，それに対する政府の態度が厳より寛に変ったこととが，イギリスの政治を他国の政治よりすぐれたものにしたゆえんであると考えた著者が，西洋の新聞を読んで感じたことを書き記したもの。巻1に言論の作用，政党の関係，新聞の盛衰を，巻2に自由言論，出版検査官，宇韋陸(John Wilkes, 1727–1797)伝，仏国革命の影響，孤別図(William Cobbet, 1762–1835)伝，新聞紙印税，自由言論総論を，巻3に新聞紙の濫觴，新聞社，竜動（ロンドン）新聞，地方新聞，毎週新聞，竜動小新聞，雑誌，電報，出版報告社をおさむ。

この解説とともに明治20年（1887）207ページ，丸善発行などのデータを明記していることはもちろんである。この解題目録では解説は原則として1940年（昭和15）以前に出版された文献について，200字以内で書かれている。ただしその中，重要度の低いものはこれを省略した，と凡例に説明してあることからもわかるように，本書が一段格づけされているわけである。

複刻・幕末明治新聞全集

話はまたもとの探書物語にもどるが，私が二度目に本書を入手したのは1965年10月で，大阪の万字屋書店から購入した。値段は74,500円で1939年（昭和14）の3円50銭は現在ではそんなものではないかと思う。それほど本書は稀覯本（きこうぼん）だとは思わないが値段を知ってそんなものかなァと思ったわけである。東京の世界文庫という出版社から「幕末明治新聞全集」を合計8冊連続出版している。1961年2年にかけて，かつて出版した「新聞全集」の複刻本を中心にして世に問うたもので，新聞発達史専攻のものからは大いに歓迎された。元版ももとより複刻であるが明治文化研究会の尾佐竹猛が責任者となって，大盛堂から発刊し5巻で，1934年（昭和9）から翌年にかけて出版している。文久新聞から明治3年までのバックナンバーの揃っている新聞を選んで複刻したが，新版ともいえる世界文庫本は，同じ文久時代の新聞から明治5年の「新聞雑誌」まで延長複刻している。また「別冊」として1962年4月29日付で第8冊目を出している。天皇誕生日を選んだのかも知れない。

実は私のくせとして複刻，複製というのは原本と違った感じを受けるので，やはりとっつきにくいこともあり，むしろ文庫本にでも収録してもらったほうが読みでがあるとさえ思っている。あまのじゃくかも知れない。といった事情も手伝ってこの世界文庫本の全集は，配本を受けてもほとんどほったらかしていたのが実状である。もっと正直に卒直に白状すると，イギリス新聞論，それも「ザ・タイムズ」を中心に調べてみたいことがあり，2，3種関係資料にあたった際に「英国新聞大意」正確には単に「新聞大意」であるが（表紙は「新聞大意」で開巻第1ページには「英国新聞大意」となっている）これは1873年（明治6年癸酉9月）に当時かなり影響力のあった新聞「新聞雑誌」附録として発行されたもの（上下2巻に別れている）を知っていたので，世界文庫本の全集別冊を書架から引っ張り出した。この全集の「別冊」は「英国新聞大意」と驚いたことには，この「泰西新聞論」との二冊が合わせて1本として収録されていたのである。迂闊（うかつ）といえば迂闊で汗顔のいたりである。

新聞大意と開明鑑記

「英国新聞大意」もその後2年をおいて1875年（明治8）に御用書肆（しょし）山口屋佐七が発行した和本仕立ての木版印刷，上下二巻の「英国新聞紙開明鑑記」安川繁成編も岩手日報目録によって30年ほどむかしに私は承知していた。しかしこの2書とも現本にはお目にかかっていない。「新聞大意」は新聞の付録としてかなりの部数が印刷されたものと思われるので，所蔵している人もまだあるだろう。「英国新聞紙開明鑑記」はおそらく印刷部数も少ないだろうし，巷間（こうかん）に流布されるような性質のものではないので，何といっても稀書の部類に入るものと思う。私はこの2書の現本を見ていないのでなんともいえないが，世界文庫本の「別冊」の解題をみると，岡野他家夫が詳細に説明している。「英国新聞大意」も「開明鑑記」の編集者安川繁成が英書から翻訳したものではないか，とほぼ断定的に説明している。99パーセントまで同じ文脈であるらしい。「新聞大意」は原書を翻訳したと緒言にいっているが，だれが翻訳したのか，また原書は何という書名であるかなどは一言も触れていない。だから安川が翻訳したものらしいということに“断定”したものであろう。

「英国新聞大意」の内容は英国新聞紙由来の大略，新聞紙の扱い方，新聞紙の本人(Owner 持主の事か）支配人及びイデートルの事(Editor のこと)スペーシアルコルレスポーデンーツの事(Special Correspondent のこと）報告者（以上上巻）議院報告の事，ペンネイエリネイルスの事(Penny aliner で1行1ペニーでくだらない記事を書き新聞社に売り込む文士のこと）爾余の新聞紙掛りの事，レンタルス・テレグラムの事(ロイター Reuter 通信社のこと）サブエデイトルの事即「エデートル」の助役（Sub=editor, Editor の助役，副編集（発行）人のこと）アドウルチイスメント之事(Advertisement のこと）刷行局（印刷局のこと）新聞紙法則（以上下巻）といった項目を立て各項とも要領よくまとめている。最後のページには「英国の議院は外国無比なることを議院の条に説きしが，また英国の新聞紙も世界中に於て最良最貴にして且つ最自由の権ありと云うべし」と結論をひとことでしめくくっている。

「英国新聞紙開明鑑記」の目次にしても「特別報告者の事」とあればルビをふって「スペシャル・コルレスポンデント」と説明している程度で，岡野他家夫のいうとおり，「英国新聞大意」とほとんど同じ見出し同じ文句を用いているようである。どちらかの書を読めばそれで事足りるということになる。

安川繁成という人

「英国新聞紙開明鑑記」の編者安川繁成は岡野の解題によると，群馬に生まれて江戸に遊学し大学南校に入る，1869年（明治2）官途につき2年後岩倉大使に従い外遊している。のち工部大書記官，会計検査院部長になった。東京市参事会員，代議士にもなり実業界でも活躍したようである。イギリスのことに詳しかったということが，「鑑記」を書く動機だったかも知れない。新聞について特に勉強してきたとも思えないが，新聞の必要なこと，言論は自由であるべきこと，わが国にもイギリスのような新聞の出現を期待している事などを強調しようとしたことは，単なる洋行帰りの物好きから出版したものではない。福地桜痴とは違った意味で，すなわち桜痴は新聞記者のキャリアーをもっているが，安川は bystander 的立場におりながら，この「著述」をしたということは，新聞学を拓くためにパイオニアの役割りを果している。野球でいえばヒットを打って1塁に出たトップバッターである。

67年3月といえばほんの数ヵ月ほど前であるが，日本新聞資料協会の機関誌「新聞資料」3月号に「安川繁成編輯・英国新聞紙開明鑑記・上」の表紙写真と同書の扉（五等議官安川繁成編輯・英国新聞紙開明鑑記・全二冊・明治八年二月廿日・詩香堂蔵版）の写真などを掲げている。本書の入手は大成功であると，かなりオーバー・バリューして内容（叙言を全文）を収録している。新聞資料誌の筆者のいう通り1875年（明治8）6月28日に改正新聞紙条例・讒謗律（ざんぼうりつ）が公布された。この悪法を社説で攻撃したため東京曙新聞の主筆末広鉄腸（重恭）が禁獄に処せられ

たのをはじめ，7，8月にかけて甫喜山景雄，成島柳北，岡敬孝，横瀬文彦，塚原靖，坂井喜三郎，藤田茂吉，長谷川孝ら9名，翌年にはさらに全国的に弾圧し新聞記者40名が監獄にほり込まれた。この新律のため福沢諭吉がスポンサーであった明六雑誌も75年11月自発的に廃刊している。いずれにしても言論の恐怖時代を現出していた当時に，開明鑑記が発行されたことは，新聞記者や新聞経営者に貴重な資料を提供したことになる。

新聞資料誌によると，本書の体裁は黄表紙で美濃判紙に木版で印刷，上巻38枚（76ページ）下巻42枚（84ページ）A5判の大きさで和とじで製本されている。秋月種樹，阪谷素の序文があり安川繁成を紹介し本書を推薦しているのは当然である。じっくり腰を落ちつけて時間をかけて探しておれば，このような稀本もいずれは手に入れることができる，ということもこの資料協会の“実績”が証明しているといえる。92年もむかしに発刊されたこの本がいまだに生きているという事実は，編者安川繁成，もって瞑（めい）すべしである。

英国新聞の研究が主題

さて「泰西新聞論」のことに話をもどすが世界文庫本の「幕末明治新聞全集」別冊にある岡野他家夫の解題によると昭和のはじめ吉野作造（明治文化全集の編集責任者）が岡野に対して“天野という先覚者が既に明治10年代に新聞論を書いて，出版されているはずだ。その方面での劃期的な著述で，当時の政治家や言論人などに多大の刺戟を与えた啓蒙書であるようだ”といったと書いている。当時の「内務省納本目録」などによって，この書物が出版されたことは確認したが，現本は東大明治新聞雑誌文庫にも，そのほか心当りの関係者，各地の図書館，文庫でも発見されないまま20年を経過した。ところが戦後になり本書の著者天野鎮三郎の後嗣，故中央大学法学部教授の天野徳也氏が，先考の遺稿とともに辺地に疎開，戦火をのがれた愛蔵の1本を筆者（岡野）に割愛恵贈されたのであった。

これは岡野の解題の文章をそのまま引用したものであるが，こうなるとなかなかの稀本ということになる。岡野の入手した現本をそのまま世界文庫本の全集「別冊」に採用したものと思われる。

安川繁成の訳したものとみられる「英国新聞大意」にしても，またその安川が姓名を明らかにして「英国新聞大意」刊行後2年目に出版した「英国新聞紙開明鑑記」にしても，そしてこの天野鎮三郎の「泰西新聞論」にしても，3書を通じて看取されることは，イギリス新聞紙が中心テーマであり，新聞と政治，新聞社の組織や機構，新聞の発達史その他，イギリスをはじめヨーロッパの新聞事情を紹介するとともに，言論の自由についてその尊重すべき理由を縷縷（るる）述べている。言論機関の在り方を示唆している本格的新聞論といえるし，新聞概論，新聞発達史のテキストにもなる。新聞の歴史は言論抑圧に対する抵抗の歴史である。「泰西新聞論」が1887年（明治20）という時点に発行されたことは，各有力新聞はいずれも政党の機関紙となりさがり，専ら政論をこととしており，一方新聞条例は頻りに改悪されて言論弾圧を意図し，2年後の1889年（明治22）2月11日には帝国憲法発布，翌年第1回帝国議会召集（11月25日）と物情騒然たる時代であるだけに，天野鎮三郎の「泰西新聞論」出版は新聞学への啓蒙書といった功績よりも，政治に携わるものへのテキスト的価値をもつものであることは，当時の“政治と新聞”のありかたからみても一目瞭然である。

天野鎮三郎という人

天野鎮三郎という人はどんな人間であったか。大日本人名辞書（1886年・明治19年初版・田口卯吉編・東京経済雑誌社刊・新訂版）をみても見当らないし，明治文化研究関係の単行本，雑誌にも名前がでていない。前記岡野他家夫によると“篤学の隠士”ということになっている。さもありなんと思う。世界文庫本の新聞全集別冊記載の「泰西新聞論」解題をみると，天野の略歴を紹介している。この新聞全集別冊は1962年（昭和37）4月刊行であるが，岡野はそれよりも10年前1952年昭和27）11月に出版された「開国百年記念明治文化史論集・乾元社刊」に「天野鎮三郎の業績」を書いている。世界文庫本の解題はこの史論集の内容を要約している。天野の業績論の末尾に「筆者

は天野家の当主，鎮三郎翁の嫡子徳也氏の談に聴き，同氏の秘蔵にかかる「泰西新聞論」及び「泰西十五大決戦史」を基礎資料とし，いささか自分の調査を参考としてこの小稿を綴った」と岡野が天野家からいろいろ材料を仕入れた旨を記している。

天野鎮三郎は，岡野の記述によると，本多藩の臣，天野柳右衛門の子として1841年（天保12）7月12日，江戸日比谷の岡崎藩邸(本多侯)で生まれた。1875年（明治8）藩主本多忠直と同行イギリスに渡った。史学を勉強したらしい。7年目に日本に帰る。1885年（明治18）私塾敏修学校をつくり数年間子弟を教育した。その当時に「泰西新聞論」「泰西十五大決戦史」の二著を公刊した。1897年（明治30）ころから世俗との交わりを断ち専ら東西の古典特に歴史の研究に没頭，1915年（大正4）4月20日，75才で世を去った。後年織田純一郎として朝日新聞社にも関係した当時の丹羽純一郎ともイギリス時代に知已になったのか，生涯の友であったようだ。丹羽純一郎は「欧洲奇事花柳春話・1877年刊」を英書から翻訳しベストセラーをつくりあげた新聞記者である。丹羽の関係していた「朝野新聞」に天野もときに寄稿していたようであるが確認はできない。

わが国最初の「新聞学」

このごろは古本即売会などでも，あまり見かけなくなったので，もう完全に稀本に仲間入りしているのが，世民松本君平著「新聞学」である。発行は1899年（明治32）12月で博文館発兌，いまのA5判でクロース表紙，本文310ページ，付録として東京政治学校設立の趣旨と学制一覧が18ページにわたって付加されている。定価は80銭。70年近くもむかしに出版された書物としては装釘（そうてい）もなかなか立派である。「新聞学」と銘打った書物はわが国でははじめてであって，新聞学に，新聞発達史に関心をもつほどのものにとっては，得がたい資料のひとつとみられているのは当然といえる。70年以前にわが国ですでに「新聞学」を名乗ったこと自体が，日本のジャーナリズム研究の深さを示していることの証左にもなる。

序文として竹越与三郎（三叉）の新聞記者論がトップにのっている。「君側の権衰えて政府に移り，政府の権衰えて議会に移り，議会の権衰えて新聞紙に移る。古今天下を制馭する所以の大勢力を数うるに16世紀以前にありては君側なり。17世紀以後にありては政府なり。18世紀以後に至りては議会なり。しかして19世紀の後半以後に至りては，即ち新聞紙にありといわざるべからず」の書き出しでイギリスのタイムズを引用し，新聞紙の勢力もまた大なり，などと説き「是れ新聞紙，新聞記者の過去と未来となり。この過去を受け未来に継ぐは今日の新聞記者の責任なり。今の新聞記者たるもの，かつて有したる光栄を感念し，将に有すべき大任を黙想し，深く自から重んぜるべからざるなり」と新聞記者論を展開し「本書を江湖に推薦す」と結んでいる。

毎日新聞の島田三郎も序文を寄せ，青萍迂謙，田口卯吉も漢文で序文を書いている。松本君平自身は「政治学校にて世民学人」として本書の成立をうたっている。「本書は余が政治学校において講述せるものを録して公刊したるものなり。題して新聞学という。本邦未だ這般の書を見ず，世人の耳目に新なるをもって，恐らくは奇異の感あるべし」と説きはじめ「誰か新聞記者に新聞学の修養を要せずというや」などと声を大にして叫んでいるが，新聞学は広義における政治学のひとつの部門である，との立場をとっている。しかし彼の設立した東京政治学校の設立趣意書でも新聞学を講じ善良なる新聞記者を養成するつもりであると強調している。もちろん官吏にも，代議院の議員にも，外交官にも向くような諸学科を教授すると綱領で明記している。

「新聞学」の目次と内容

この「新聞学」はその扉に「米国文学博士松本君平講述・新聞学（全）欧米新聞事業・東京博文館蔵版」とあり，表紙にはただ「新聞学（全）松本君平講述」とあるだけで，欧米新聞事業というサブタイトルが“もの”をいっているわけである。新聞学のテキストとして著述するためには欧米の新聞事業を参考にして，構成したほうがやりやすかったことでもあろうし，当時としてはけだしやむを得なかったことと思う。先駆者としての悩み

もあったことだろうし，松本自身なにかといそがしく奔走していた時代ではあるし，欧米新聞事業のサブタイトルは諒解できる。本書の目次からもうかがえるように“実際新聞学”といった建て前でやっているかと思えば，新聞社の組織，構成論に詳しかったり，比較新聞学にタッチしたり，要するに混沌としたつかまえどころのない，中途半端な構成を示しているともいえる。しかし1899年の時点ではこの程度のものにしかまとめあげることができなかったのではなかろうか。

大学基準協会は新制大学における大学基準の制定，適用及びその改善をまず第一にとりあげているが，分科教育基準のうち新聞学教育基準は1948年（昭和23）11月に制定され，1951年（昭和26）1953年54年と4回も改訂されているが，何学部の何学科が適当であるかといった点については，いまだに五里霧中である。法学部にあったり，文学部，政経学部，社会学部その他の学部に新聞学は分散している。ちょうど松本君平の新聞学がどっちつかずのように見えることとよく似ている。

「新聞学」の目次は序論として「近世文明と新聞の福音」をとりあげ以下次のようになっている。①第四種族の発生②新聞社の組織③探訪部④略記法と探訪記者⑤地方通信者⑥文選部に於ける経験⑦通信隊編成⑧探訪者の職務⑨探訪者の資格⑩新聞編集局一班⑪編集事務記者⑫電報記者⑬論説記者⑭主筆記者⑮新聞理事⑯社員の制約⑰訪問記事⑱新聞記者となるの道⑲新聞編集上の注意⑳特別記事㉑雑誌・新聞文学者の注意㉒匿名寄書㉓誹譏の言論㉔新聞記者の報酬㉕職業としての新聞記者㉖公人としての新聞記者㉗近世新聞の発達及び特性㉘絵入新聞㉙英国の新聞業者保護会㉚新聞記者養成㉛英国新聞事業㉜米国新聞事業㉝仏国新聞事業㉞独逸新聞事業㉟露国新聞事業㊱新聞記者の勢力及び使命

東京政治学校のこと

本書の付録になっている東京政治学校学則をみると，その学課目はたくさんあるが，新聞学の原理及び各国の沿革として「欧米新聞事業」を第1学年で，第2学年では「新聞学」として理論及び各国の沿革を，第3学年でも「新聞学」実践の課目を設けているほか3年間を通じて雄弁学，漢文学，文章修練を必修としている。講師として名を連ねているのは当時の錚錚（そうそう）たる連中であるが，新聞記者としては東京日々新聞主筆朝比奈知泉，福地源一郎，日本人主筆三宅雄次郎，織田純一郎，毎日新聞主筆島田三郎，国民新聞主筆徳富猪一郎，東京経済雑誌主筆田口卯吉，ジャパンタイムス記者高橋一知，世界之日本主筆竹越与三郎らで星亨，片山潜，志賀重昂，末松謙澄，浮田和民，和田垣謙三の名も見える。校長松本君平で幹事として根岸由太郎，志村董一，石川安次郎（半山），校舎は東京神田となっている。

ところがこの東京政治学校という学校がどんなものであったかは，まだ調べていないのでさっぱりわからない。大宅壮一を頂点とする大宅共栄圏（大宅ギルドとか大宅28人衆ともいう）主宰の「マスコミ塾」というものが東京にあるらしいが，そんなものであったかも知れない。塾に毛の生えたようなもの，というと語弊があるが，大した組織でなかったことは，のちのち話題になっていないことからも想像できる。

1957年（昭和32）6月刊「山口喜一著・老新聞人の思い出」発行地は札幌であるが，この本を目録でみて北海道の本屋から送らせたのは，何年何月であったか忘れてしまった。山口喜一は1881年（明治14）11月，福島県大沼郡高田町に生まれ，同志社，明治学院，東京政治学校に学ぶ。元北海タイムス社編集局長から支配人，取締役に選任される。戦後は1946年（昭和21）5月新北海新聞社を設立し社長となる。この略歴は同書の奥付に記してある内容であるが，新北海新聞は1950年に北海タイムス社と改称し現在に及んでいる。略歴にある元北海タイムスというのは現在の北海道新聞の前身である。この略歴にある東京政治学校に学ぶ，という点に引っかかって同書を隅から隅まで読んでみたが，政治学校のことや松本君平のことは出てこない。ただ巻末のところで「当時私は社会主義の信者であった安部磯雄，浮田和民，松本君平，織田純一郎，石川半山，幸徳秋水，木下尚江らの先輩の尻馬に乗って学生でありながら社会問題研究会に加わった」と書いているが明治何年ころかはっきりしない。この「老新聞人の思い出」は山口喜一の喜寿記念の出版で，60余年前の老記

者の思い出の数数を興味深く記述しており，特に北海道における新聞発達史にとっては寄与するところが多い。

松本君平という人

この山口喜一が前述の日本新聞資料協会の機関誌「月刊・新聞資料」73号（1965年—昭和40年1月号）で84才のまだ矍鑠（かくしゃく）たる写真をのせ，松本君平のことや政治学校について話をしている。記憶力については限度があり，常に正確であるとはいえないが，いちおう貴重な発言としてその関係部分を摘記してみよう。

松本君平は若くしてアメリカに渡り，フィラデルフィア大学を卒業，ブラウン大学院から米国文学博士の称号を贈られ，その後ヨーロッパを回り再びアメリカに帰り，ニューヨーク・トリビューンの記者となって活躍した。日本に帰ったのは日清戦後の明治29年（1896）で東京日々新聞の社友として活躍した。陸奥宗光伯の支持を得て，たしか明治31年（1898）東京政治学校を開校した。学校は神田三崎町にあった建物をあて，その後神田錦町の石造2階建ての校舎に移った。フランスの政治学校とアメリカの財政経済学校の制度に模し，実際教育を施して政治家，新聞記者を養成しようとした。この政治学校の資金は政友会の幹部が心配してつくったときいているが，なかでも星亨が主となって奔走したらしく，星は校主のような位置にあった。その星は34年（1901）6月21日，伊庭想太郎のため暗殺されたので，政治学校も支持者を失い財政的に困ってきた。これはよほど後のことになるが（年月を明記していない）山口が学校を訪れたときは，政友会本部の地下室を校舎にあてていた。

山口がこの学校を卒業したのは明治34年だから，第1回卒業生になるが（山口は3年生に編入してもらったようである）同期生などについては何も語っていない。「老新聞人の思い出」の中に山口が信州松本へ行ったのは明治36年4月で，信濃民報の編集長をやっていた藤原鎌兄の世話で，松本戊戌商業学校の教師になった。藤原は東京政治学校の同期生でなかなか親切な男である。と記しているくらいで，ほかに同期生などについての記述は見当らない。松本君平については次のように述べている。

松本先生はそのころ竹越与三郎，小手川豊二郎と並び称された3大ハイカラのひとりでいわゆるハイカラーに鼻めがね，鼻下のヒゲが美しく常にフロックコートを身にまとい，寸分の隙もない風采であった。学問があって語学にたんのうで，しかも雄弁家ときているから堂堂たるものである。松本はその後明治37年（1904）郷里の静岡から代議士に当選し政友会に属してその後当選5回，田中義一内閣のときには海軍参与官となり，ジュネーブの軍縮会議にも参加した。大陸にも活躍し天津，北京で新聞を発行した。富士山麓に青年教団（組織はわからない—筆者）を結成して青年の指導に当った。昭和19年（1944）旅行先きの浜松の急死したが74才であった。山口の筆名「政民」というのは政治学校の政と松本君平の筆名「世民」の民をとり，松本が命名したと山口はいっている。

松本の「春風秋雨録」

松本君平とその主宰した東京政治学校については，以上山口喜一の語るところで大体要を得ている。明治37年静岡県第1区から代議士に当選したあと，42年，大正9年，同13年，昭和3年の5回当選しているが，普選運動にも相当活躍している。大正10年(1921)に天津で日刊 “China Times” 週刊 “China Tribune” 北京で日刊「新支那」を発行している。1870年（明治3）4月10日静岡県小笠郡中内田村に生まれたが，晩年はやや不遇で1944年（昭和19）7月28日，旅行先きの浜松市の実弟石岡孝平方で急死した。（新聞資料22号）国会団書館や国会関係のどこかには，松本君平の履歴その他について，もっと詳しいものがあると思う。君平はどちらかというと貴族趣味で乗馬姿でよく散歩などをしたらしく，また君平をキミヒラと読み「キミヒラ朝臣」などとあだ名をつけられたといったことなどを何かの雑誌で読んだ記憶がある。

松本は「新聞学」のほかに何か書いたものはないかと調べてみたが，専らしゃべることに重点をおいていたらしく，あまり書いたものを残してい

ない。ただひとつ現本を入手しているが，これは「春風秋雨録」1冊である。その自序によると「春風に咏じ秋風に嘯く三十余年なり。歳月流るるが如く志未だ酬いず，往事を追想すれば杳として夢，幻に似たり。花の旦，月の夕，事に触れ物に感ずれば乃ち筆を採ってこれを録す。蒐めて一巻となす。名づけて春風秋雨録という。明治35年5月，団子坂の寓居にて，世民生」とあり，発行は1902年（明治35）5月15日，発行所は神田区裏神保町広文堂書店となっている。定価30銭。B6判くらいの大きさで180ページ。この春風秋雨録に「新聞学」や東京政治学校について，何か記述しているだろうと思ったが何も触れていない。史談，評論，随筆，紀行，小説などバラェティに富んでいる内容であるが，ただひとつ「ウードランド墓地＝馬場辰猪」の1篇はなかなかの名文で，文末に括弧して（明治28年11月）と記している。

彼が日本に帰ったのは明治29年だから，その前年アメリカ滞在中の文章で11月というのは，その墓まいりをしたときであると思う。安永梧郎著「馬場辰猪」が東京堂から出版されたのは1897年（明治30）で，春風秋雨録の出版に先き立つ5年前であるが，辰猪の墓まいりをしたことを記述したのは，この松本君平がおそらくトップではなかろうか。

稀本・日本新聞史資料

なお松本の「新聞学」については1926年（大正15）3月に非売品のかたちで出版された「日本新聞史資料」にはじめてとりあげられたようである。この「日本新聞史資料」はおもしろい装釘で，B6判くらいの大きさであるが丁数（ページ数）を打っていない。おそらく350ページ前後になると思うが，口絵には明治初期の新聞や人物写真を挿入しており，収容した新聞，雑誌の種類も多く，製本し直したら堂堂たる「資料」になる内容である。編者は若山甲蔵で宮崎市橘通2丁目居住とあるが，同番地に「宮崎県政評論社」の名があり，発行所兼印刷所となっている。この宮崎県政評論社から発行していた宮崎県政評論誌上に連載（1925年・大正14）したものを，その都度50部づつ摺りおきをして同年末に仮綴じをしたものである，と序文のようなものを若山の名で書いている。“大正15年末にはまたこのような1冊ができると思い楽しみにしている”とも書いているが，その1冊というのは果して印刷発行されたものかどうかは分からない。いずれにしてもこの「日本新聞史資料」そのものが50部しか印刷されなかったとすれば，完全に稀本となっているわけで最近の古本市場でも殆んど見かけない。

この「日本新聞史資料」の巻末に「最初の新聞学」という1章をもうけて，松本の序言や講師の名前を列記し，東京政治学校の綱領や「新聞学」の内容，竹越与三郎の「新聞記者論」も全文紹介している。若山は“数年前までは古本のカタログによく出ていましたが，東京震災後とんと見あたらなくなり，今では新聞史資料として貴重なものの部に入っています”といっており大正末期ではもう稀本扱いである。若山甲蔵と宮崎県政評論社との関係は不明であるが，同番地であることから考えて，若山は同社の経営者ではなかったかと思われる。いずれにしても日向国宮崎といった地方で，よく資料をあつめたものであると感心する。もうひとつ若山甲蔵著として「岸田吟香翁」というのが1925年（大正14）に宮崎県政評論社から刊行されている。藤原恵文庫にのみ所蔵されているが，50部印刷されたとすればいまでは完全に稀本となっている。岸田吟香については杉山栄が1951年（昭和26）と翌年に岸田吟香顕彰会から「岸田吟香伝」を2冊出版している。続いて1959年（昭和34）東峰書院（東京）から土師清二が「吟香素描」を出版しているが，これは非売品となっており限定出版である。まとまった吟香伝としては以上の程度であるが，若山甲蔵の吟香伝は単行本としてはじめて世に出たものであるだけに，その先駆的役割りを認めなければならない。

「日本新聞暦史」のこと

明治時代に出版された新聞関係図書としては，50種前後であると思うが大したものはない。新聞字引，新聞記者列伝，新聞穴探，新聞記者評判記，新聞雑誌細見，記者自伝，政論集などといったところである。「新聞大意」「英国新聞紙開明鑑記」「泰西新聞論」「懐往時談付新聞紙実歴」「新聞

学・欧米新聞事業」などがとりあげるに足る“名著”である。そのほかにたとえば1882年（明治15）巌々堂から出版された小池洋二郎著「日本新聞暦史」というのがある。1922年（大正11）小野秀雄著「日本新聞発達史」が新聞史では代表的な名著になっているが，小池の「新聞暦史」も新聞史における先駆的な述作となっている。「新聞暦史」と「暦」を使っているところなど一風変わっている。1870年（明治３）から1882年（明治15）にいたる間の大小新聞の年表が主で，その点から日本新聞の暦史であるといえる。（朝日新聞社史編修室所蔵）

もうひとつは朝倉亀三（無声）著「本邦新聞史」が宮武外骨の経営していた大阪の雅俗文庫から，1911年（明治44）５月和本のかたちで発行されている。これもいまは稀本となって市場には姿を見せない。外骨はたくさん明治文化関係の雑誌，単行本を出版しているが，本書は彼の出版したものの中では，高く評価される資料のひとつである。本書は全般的な日本における新聞史ではなく，むしろ外骨趣味といえる瓦版（かわらばん）研究に重点をおいている点は，かえって本書を好事家垂涎（すいぜん）の的たらしめている風変わりの本である。何よりも数多く挿入されている挿絵や複刻した瓦版が好資料である。

小池の「日本新聞暦史」と朝倉の「本邦新聞史」の２冊はやはり明治時代における新聞発達史関係資料の双璧をなしている事実は否めない。やはり明治末期の44年（1911）５月「本邦新聞史」と同じ雅俗文庫から御大の宮武外骨が「筆禍史」を和紙和装で出版している。明治政府時代の筆禍事件は巻末のところに数ページを割いているだけであるが，徳川幕府時代の筆禍史に詳しい。これももとより新聞関係図書としてひと役を買っている。今次大戦後さかんに発禁書について，あるいは言論弾圧史について，類本が続出しているが「筆禍史」が戦前しかも明治末期に上梓されたことは特筆に価する。

大正時代にはいると

明治時代に発刊された新聞関係図書としては以上のような書物が，いちおうめぼしいものとして推すことができる。大正時代に入るとどんなものが出たか，簡単にこれもめぼしいところをピックアップしておこう。明治時代に数倍する関係図書が出版されており，わが国のジャーナリズム発展の跡を裏付けているが，煩瑣（はんさ）を避けて軽くデッサンしておく。まず目につくのが大正も４年（1915）３月に「最新実際新聞学」が出ている。著者は毎夕新聞主幹兼編集長の小野瀬不二人で植竹書院刊，定価１円30銭，Ｂ６判に近く350ページ，クロース表紙のがっしりした装釘でなかなか凝っている。本書の序文によると Wisconsin 大学の新聞学教授 Bleyer, Willard Grosvenor の近著“Newspaper writing ans editing” 1913年（大正２）版の翻訳を骨子として多少日本の事情を説明し比較したものである，と述べているが，Bleyer をドレヤー氏などと誤記している。読んで字の通り“新聞の書き方と編集”といった内容であるが，当時毎夕新聞は東京を中心にさかんに売れていた新聞ではあり，その編集も綜合編集として“夕刊”新聞編集のやり方を創始した新聞であっただけに，本書のあちこちに引用されているトッパンは興味をさそっている。明治から大正初年にかけての新聞編集史のサンプルを提供しているともいえる。

著者（表紙には訳著となっている）小野瀬も序文のうちで触れているように Schuman の“Practical journalism, a complete manual of the best newspaper methods”からヒントを得て書名を「実際新聞学」としたものらしい。

翻訳で思いついたが“The making of a newspaper man”を Samuel G. Blythe が出版しているらしいが，手元にある“Refernce books in the mass media”にも見あたらないし確認できない。この原書を翻訳というよりも翻案して「新聞記者生ひ立の記」を郡山幸男訳で1919年（大正８）10月，縦横社という本屋から出版している。家蔵のものは1919年版であるが，この本のフルネームは「波瀾重畳新聞記者の生涯・一名・新聞記者生ひ立の記」とあり，米国サターディ・イヴニング・ポスト記者，サミュエル・ジ・ブライス著，経堂・郡山幸男訳と扉に印刷している。ちょっと腑（ふ）におちないのは，この本が1914年（大正３）出版として岩手日報図書目録にも上野文庫

解題目録にも記載されていることである。そういえば杉村楚人冠，堺利彦，渋川玄耳，高島米峰，松崎天民らの序文のうち松崎天民の文章の末尾に（大正3・6・14）と記していることである。1914年版は発行所も新声社とあり，ページ数も390で写真の数も多いようである。従って14年版が初版で5年後に再版のかたちをとったものらしい。口絵の写真版も“The Japan Advertiser”の1919年8月24日付の Front page を使っている。わざわざここにとりあげるほどのものではないが，アメリカ出版のジャーナリズム関係の原書が，ぼつぼつ翻訳されはじめたことを示すものとして興味がある。

「最近新聞紙学」の出版

ブライスの「新聞記者生ひ立の記」翻訳を1914年（大正3）とすると，続いて翌年大正4年12月に杉村楚人冠の「最近新聞紙学」が慶応義塾出版局発行，東京堂発売として世に現われた。A5判のクロース装釘，箱入り，500ページに及ぶ堂堂たる体裁である。定価1円80銭。いまならさしずめ豪華本といったところであるが，B6判で1916年（大正5）にも再版を出している。こけおどしではなく従来出版された新聞学関係のどの本よりも，内容において数段すぐれている。彼が新聞学といわず「新聞紙学」といったところなどおもしろい。自分では「紙学」で押し通したいつもりであったようである。著者が中央大学と慶応義塾で講話に用いた講本をもとにして，執筆したものであると巻頭で述べている。1種の新聞概論で新聞記者用のテキストにもなるだろう。総論，材料収集篇，原稿製作篇，紙面整理篇の4部から構成されている。

「最近新聞紙学」の初版が出た翌年1916年（大正5）現代叢書の1巻として「新聞」が徳富猪一郎監修・吉野作造編集で民友社から発行された。ふりがなつきの平易な文章で新聞の本質，ありかたなどについて，一般人に分かりやすく説いている。B6判，320ページ。赤いクロース装釘で瀟洒（しょうしゃ）な本である。平易な文章といっても文語体で書かれており，ルビをはずしたらとっつきにくい感じを与えるかも知れない。上野文庫解題目録でも「例を主として外国の新聞にとって，新聞は何故に存在し，何の目的をもって経営され，いかにしてつくられ，また維持されるかを平易に説いたもの，新聞社，新聞記者，言論の自由，新聞の営業，新聞の編集，夕刊新聞，地方新聞，戦時通信員，婦人記者，閑文字，新聞の製造，新聞の歴史の12章からなる」と説明している。第3章で「言論の自由」を特にとりあげて30ページにわたり発売禁止，民衆心理，名誉棄損について外国の事情を引用するなど，さすが吉野作造の執筆したものであると首肯せしめる。

新聞学界も大正7，8年からだんだんいそがしくなり，責任あるどっしりした著述もぼつぼつ出てくるのであるが，いちおうここでは明治時代に重点をおいてこの走り書きを終りたい。

（文中敬称略）